



Title	編集後記
Author(s)	
Citation	モンゴル研究. 2011, 26, p. 71-71
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102362">https://hdl.handle.net/11094/102362</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 編集後記

◇3.11 震災を経て、日本社会は大きく変わろうとしている。何よりもまず、私たちの意識がどこか違う。自然と人間との関係、人と人との関係、社会の目指すべき方向どれも再認識し、新たに構築していかなければならない、そんなふうに思えてくる。私たちの行動様式も変わってきた。節電、節約、エコを心がけ、スーパーの釣銭を義援金箱に入れ、食品の安全性に関心を持ち、産地に思いを馳せ、安心な地域社会に生活する、そのために何が必要？と考える。今大切なことは？と自問自答し、少し実行する。こんな内からの変化はここ数十年なかった。

◇本号では、“「民主化」の20年”をテーマとして『モンゴル研究』初の特集を組んだ。モンゴルにおいて1989年末から1990年に端を発する「民主化」を求めての動き、それから20年に当たる2010年の節目に、この間のモンゴル社会の変化を見つめてみようという試みである。特集に応じて湊さんと内田さんが論文を寄せてくれた。可能ならば、例会で議論を重ねその成果を『モンゴル研究』に発表するというのが、望ましい形ではあったが、現状において、ここ数年開かれなかった例会を論文の中間発表としてもち、話し合えたことは第1歩であり、それが26号として結実した。この取り組みは、今後合評会を開き、深化、継続していけるものと思う。

◇また、「置き薬」の普及活動でもって、現地、とくに地方に深く入り込んで生のモンゴルを見てきた内田さんが、伝統医療を取り上げ論文としてまとめたことは、『モンゴル研究』の新たな地平を開いたのではないと思う。

◇本号から『モンゴル研究』は電子版での発行となった。財政難による苦渋の選択である。“廃刊”、“休刊”、由々しい言葉が『モンゴル研究』を取り巻いている。できるなら、自分達の土俵を守りたい。闘えるこの場を安易に失ってしまっていないものだろうか？ 会員の皆さんの投稿を『モンゴル研究』は待っている。電子版への移行が新たな一歩となることを期待したい。

(吉本るり子)

本誌の電子版への移行に伴い、賛助会員制度の廃止を決めました。

長年本誌を支えてくださった賛助会員の皆様には心より感謝申し上げます。

(モンゴル研究会会員一同)